光と闇のはざまに

織倉正美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
光と闇のはざまに

【Nコード】
N8505Z

【作者名】
織倉正美

【あらすじ】
ファンタジーのボーイ・ミーツ・ガールものです。
神々の争いに巻き込まれる主人公とヒロインの運命を描いています。

序

「ネルセ＝レアディ……おまえからからわざわざ俺を誘ってくれるなんて珍しいな。どういう心境の変化かな？」
そう言って悪戯っぽく笑う黒髪黒瞳の青年を見返して、ネルセ＝レアディは深々とため息をついた。
人選、いや神選を誤ったかもしれない……。
しかし協力してくれそうな神のうち、彼以上に力を持つ者はいないのだ。
「イフェ＝ラディアス、あなたに頼みたいことがあるんだ。実は……」
「リ＝スファノアの馬鹿野郎が、気違いじみたことを企ててるから、それを隠密裏に処理する手伝いをしてほしいっていうんだろ？」
みなまで言わせずネルセ＝レアディの言葉を継いでみせて、その驚きの表情を楽しみながら、黒髪黒瞳の青年……イフェ＝ラディアスは静かに笑った。
「あなたは……知ってたのか……」
「俺は『耳がいい』からな……。たいていのことは知ってる。なにか、知りたいことがあったら聞きにくるといい。おまえにならなんでも教えてやるよ」
「それなら話は早い……。彼の企ては危険だ。私に力を貸してほしい」
「やだね」
イフェ＝ラディアスは、小馬鹿にしたように言うと意地悪く笑った。
「そんな面倒なことを何で俺が手伝わなければならないんだ。そんなことはリ＝セスティスにでも頼めばいい。あいつは真面目だし、おまえに惚れぬいてるから喜んで力を貸してくれるだろうよ」
できることならそうしている……。それができないから、こうし

て、こんなやつに頭を下げているのだ。
少年とも少女ともとれる、あるいはその両方でもない繊細な美貌を怒りにふるえさせながらも、ネルセ＝レアディはつとめて平静に答える。
「セスティスに頼めばことは隠密裏ではすまなくなる。下手をすればすべての界を巻き込んだ戦乱になりかねない」
「確かに。あいつは真面目だけど融通なんてものは全く利かない石頭だからな。少なくともスファノアの阿呆に決闘を挑むくらいのことはやってのけるだろうな」
神同士の決闘!？　それだけでも界のひとつやふたつに、致命的な天変地異を起こしかねない。
「解っているのならふざけないでくれ！　こんなことを頼めるのはあなたしかいないんだ。だから……」
「なかなか頼み方がうまいじゃないか。確かに俺が協力すれば、あいつの企てを隠密裏に葬り去ることも可能だろうな。まあ、おまえがそこまで言うなら引き受けてやらんこともないが……」
ネルセ＝レアディは相手の言わんとすることを察し仏頂面で言葉を継ぐ。
「条件次第ってワケか」
「そういうことだ……条件といってもたいしたことじゃない。おまえ、もう何か策は立ててあるのか？」
イフェ＝ラディアスの問いに、ネルセ＝レアディはぐっと言葉を詰まらせる。
何も考え付かなかったからこそ助力を求めに来たのだ、なんて言えない。
「そんなことだろうと思ったよ。まあそれならちょうどいい。俺の条件はただひとつ、この件の処理に関して俺に立てた策に従うこと、それだけだ」
イフェ＝ラディアスの意外な言葉に、ネルセ＝レアディは思わず怒りを忘れて問いかける。

「何か、いい策があるのか！」
「ああ……とっておきのがな。おまえはただ、自らの力のかけらをふたつ用意すればいい。核に使うだけだから、それほど大きなものでなくてもかまわん。それさえ用意してくれれば、後はこっちですべてけりをつけてやる。どうだ？　そちらにとってもかなりいい条件じゃないか？　我ながら気前のいいことだと思うがな……」
確かにいい条件だ。かけらを渡すのは危険だが、小さい物がふたつ程度なら、悪用するにしても、たいしたことはできないはずだ。
だが、あまりに話がうますぎる。何か裏があるに違いない。
「私のかけらをふたつ……それを核にしていったい何に使うんだ？」
「媒介に使うのさ。それを利用して奴の崩そうとしている均衡を支えようってわけだ。残念ながら属性の違う俺の力を奴に気付かれずに送るには、それが必要なんでな」
「なるほど。私の力をつかって自分の勢力範囲を広げようって魂胆だな。そのついでに均衡も支えてくれるってわけだ」
「御名答……まどろっこしいけど、それが一番いい方法だろう。違うか？」
つまりは以前からネルセ＝レアディが助力を申し出るのを予想していて、それを利用することを考えていたに違いない。
最初から引き受けるつもりでいながら、こちらをからかっていたのだ。
しかし、そういうことなら逆に信用してよさそうだ。イフェ＝ラディアスは食えないヤツだが、少なくとも自らの利益がからむ時は、約束を破ったことはない。
「わかった。かけらは明日までに用意する。目的を果たせるのなら好きなようにつかってくれ」
「オーケー。これで契約成立だな。まあ適当に期待して待っててくれ」
そう言ったイフェ＝ラディアスの瞳が、一瞬、悪戯っぽく光ったことに、ネルセ＝レアディは気付かなかった。

零章

0.

下弦の遅い月が、地平線から顔をのぞかせた。
月光は淡い。
しかしその淡い月光は、ふたりの姿を追跡者へと示した。
追跡者の長は狡猾な笑いを浮かべると、部下に合図を送り、巧妙に退路をふさがせる。
そして自分は、ゆっくりとふたりの方へと向かった。
「姫君……ここまでですな。あなたは裁きを受けねばなりません。その邪悪な闇の使徒とともに、偉大なる光神へ、その汚れた魂を捧げなさい。さすれば、あなたの罪は浄化され、再び光のもとへと還ることができます。姫君……神は慈悲深い。あなたのように汚れきった存在でさえ救ってくださるのです。さあ、その邪悪な闇の使徒を神へと差し出しなさい」
「この子は……ルアークは私の息子です。そしてあの方の……私を救ってくれたあのひとの息子です。この子は渡しません。たとえ魂が滅びても、私はこの子を護ります」
姫と呼ばれた、まだ年若い美しい女性が、決然と言い放ち、我が身を盾にして息子をかばう。
「どうやら完全に魔に魅入られてしまっているようですね。自ら神のもとへ赴く気がないのなら、私が送ってさしあげましょう。さあ姫君。浄化の光に導かれ、神のもとへと旅立ちなさい！」
追跡者の長はそう言って、手に持っていた宝玉を掲げた。
その一瞬後、宝玉は目が眩むほどの閃光と化し、光の奔流となって母子を襲う。
「くっ……」
浄化の光などではない。破壊と殺戮の光がふたりを包みこもうと

した瞬間、辛うじて間に合った防御結界が、何とか光を押しとどめる。
「ほほぅ……さすがはかつて、巫女王の後継最有力候補だっただけのことはありますね。しかし、これではどうですかな？　……そぅれ」
そう言うと男は、輝く宝玉を虚空へ放り投げた。
宙に浮かんだ宝玉から、さらに光がほとばしり、ふたりに殺到する。
だめ……このままでは……。
結界は、もういくらも持ちそうにない。覚悟を決めるときが来たようだ。
何としても……この子だけは、助ける！
彼女は心を決めると結界を解除し、自ら光の奔流へと身を投げた。
全身を光に焦かれながら、その光の魔力を取り込み、息子へと集中させる。
「母上！」
息子の悲痛な叫びを耳にしながら、彼女は転移の呪法を完結させた。
生きて……ルアーク……。
「ははうえー！」
ルアークの絶叫が響き、彼がいずこへかと消えた瞬間、光がすべてを舐め尽くす。
そして……虚無があたりを支配した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8505z/

光と闇のはざまに

2011年12月26日22時55分発行